



金融財政

2006年(平成18年) 6月8日 (木) 第9752号 (購読料金 月額税込み5,565円)

「過去」と向き合う勇氣

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



朝の通勤路、細い路地裏を抜け石段を数段上る。大きな樺のそばに歌人・国文学者の「窪田空穂

(1877-1974) 終焉の地」と標識がある。住まいの痕跡は全くない。46年間この地に住んだ作家も立ち止まり同じ高い空を見上げたことだろう。

東京・文京区は、予期せぬ場所所で鵬外、漱石や露伴などに出くわす。だが、偶然ではない。「過去」に遭遇する装置を、行政がしつかり造つてくれているからだ。

友人から話題作の女性監督、熊谷博子氏の7年かけたドキュメンタリー映画「三池」終わらない炭鉱の物語」に誘っていた。正直、暗く悲惨な映像が浮かび、気乗りがしなかった。だが観賞後は見慣れた風景さえ、「過去」のフィルムで覗いている自分がいた。

「三池」のフィルムが誕生したきっかけは、大牟田市が98年の秋、閉山した三池炭鉱の町の再生に向けた企画「歴史を生かしたまちづくり」に始まる。パネリストに招かれた熊谷氏はシンポジウムの前に市内を回り、宮原坑に立った。ぼう

ぼうの秋草の中、美しい赤煉瓦の建物とやぐらを見た。映画の冒頭は、熊谷氏が衝撃を受けたそのシーンからカメラが回る。

「建物に足を踏み入れた瞬間、下から働く人の声、昨日まで使われていたような灰をかぶった電話」などから、廃屋の「場」の持つ力を、熊谷氏と共有できた。彼女はシンポジウムでこれらを映像として残したい、と訴えた。だが、行政は

「ここは囚人労働、強制労働、争議、事故と負の遺産が多過ぎる。閉山したのですべてを忘れて次に進むべきだ」という強い拒否に遭う。

「負の遺産」に熊谷氏は二重の衝撃を受けた。そこで地元で徹底的に議論をする。「負の遺産というが、それは日本の歩んできた道そのものだ。それを消し去るのは日本の歴史、そこで働いてきた無数の人たちが生きてきた道や姿まで消し去ることなのだ」

3年目ついに行政を動かした。市民、行政、撮影スタッフの共同作業として01年に撮影開始。影の足跡を消去して、光だけの軌跡は、人間の営みの経済史にはあり得ないことだから。

CONTENTS

●解説 「中位」規制で大手の利益半減、 中小の淘汰も(木村泰史) 貸金業の規制強化—業界への影響試算…………… 2	●あと・らんだむ (神崎倫一) …………… 9
●BANCO 社会保障に安定財源を(富田俊基) …………… 3	●政経深層 監査法人「不正」の背景(岡 憲策) …………… 12
●照一隅 岐路に立つ世界経済(矢) …………… 5	●カラム・コラム (藤原作弥) …………… 13
●解説 「政治」との緊張関係どこまで、 「求心力」鍵に —「御手洗経団連」、課題山積の船出へ …… 8	●連載小説⑱ 魂の時 (砂原和雄) …………… 14
	●資料 全国企業倒産報〈4月〉—帝国データ …………… 18
	●資料 2006年3月期銀行決算③ …………… 19